博士論文要旨

恵那地方の障害児者地域生活運動
―生活綴方と人々が織り成す現代史―

立命館大学大学院先端総合学術研究科
先端総合学術専攻一貫制博士課程
シノハラ　マキコ
篠原　眞紀子

本論文は，岐阜県恵那地方で，戦後から 1980 年代にかけて盛んであった生活綴方・地域教育の中で，さまざまな障害を持った障害児者の就学運動にはじまる地域生活運動の現代史を示す研究論文である。恵那地方では，1970 年代に，普通学校の中で，中度・重度の障害児をも対象とする養護学級が開設された。同時に市内全体の障害児が集まる合同教室が開設された。重度障害児はそれまで，就学猶予・就学免除の名の下に学習の機会を奪われていた人たちである。恵那式の統合教育といえるものがどのように障害者の地域生活運動に連動していったのかを明らかにすることが本論文の目的である。

本論文の研究方法は，運動に関わった人たちの生活綴方，その人々の生活史,『中津川市史』などの文献資料を用いた歴史研究である。特に，障害者本人である「仲間集団」が綴った『愛の鈴』，その母親集団が綴った『かやのみ』，地域に根差す統合教育のカリキュラムを考え出した教師集団の綴った『私の教育方針』，学校および市民の間にも取り上げられた『ひがし交流文集』などの生活綴方を取り上げた。

第 1 部は障害児者地域生活運動の黎明期，第 2 部は障害児の就学運動の発展期，第 3 部は障害者の地域生活運動の成熟期とした。

第 1 部第 1 章では，国家規模で行われた教員の勤務評定時に，恵那人事協議会が行った実態調査，選挙，人事実践を明らかにした。この第 1 章では，教師たちが「親・地域との共闘」という戦略をとって教育の自治を守ったことを明らかにした。第 2 章では「豆学校運動」について述べた。また，生活綴方に付随して調査される自らが調査に加わるというピアによる教育調査の実態を明らかにした。障害児者運動では本人の自主集団と，親・地域の支援集団が存在したが，この豆学校運動で生徒本人の自主集団と親・地域の自主集団の組織化形成の萌芽を示した。

第 2 部第 3 章は恵那式の統合教育の形成過程を示した。第 4 章では，教師が教育の自治を守るために結束し学習指導要領に対峙する「私の教育課程」を通して教師集団が結束し，母子分離教室「かやのみ教室」で母親集団が結束したことを示した。第 5 章では「合同教室」を中心に障害児の集団である「仲間集団」が形成されたことを示した。そして，1970 年代後半に障害者の地域生活運動の拠点となった「生活の家」の誕生の経緯を示した。

第 3 部第 6 章では親集団の多くを含む「中津川市障害児者を守る会」が同じ立場の自宅待機や遠方施設入所の障害者と家族への調査を実施し，障害者や親に地域社会につながるアクセスルートを作ったことを明らかにした。その調査で帰郷した障害者も仲間集団として加わった。第 7 章では仲間集団による廃品回収運動を示し，第 8 章では仲間集団の生活

綴方を中心に市民にまで展開された「愛の鈴」運動を，第 9 章では後援会活動を示した。そして，第 10 章では，「生活の家」の移転に伴い，仲間集団が開拓者たちとユイの関係を築き「生活の家」を地域に根付かせた経緯を明らかにした。

以上の研究から，恵那における障害児者の地域生活を成り立たせている必要条件が，障害者の「仲間集団」と支援員のやり取りから生まれた綴方を関わる人たちで理解していくこと，綴方集を手作りし手渡しながら協力していくこと，市民からの募金による仲間集団の生活の維持，地域社会での障害者の社会人としての承認であったことを指摘した。

この運動の考察により，知的障害，身体障害，精神障害，聴覚障害，発達障害の障害者本人のみならず，親，教師・支援者を中心として，市民を含む集団の形成過程を明らかにすることができた。そして，この集団の人々の実践が，生活綴方を通じて障害児者の生活を学び合いながら，地域社会を作り出していくという意味での「社会化」であったと結論づけた。